

町医者だより

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

令和03年07・08月合併号 暗い今年の冬

コロナ感染者が減少してもいない時期に日本では本来、秋から冬に流行するRSウイルス感染が夏に小児にはやっているという話を聞いて、待てよ、日本の小児科医がそんな先駆的な視点を持ち合わせているはずがないので何かネタになる資料があるはずと思い海外の記事を当たってみました。

やっぱりありました、南半球で昨年暮れにRSウイルス流行の記事が

インターネットのニュース (healthline.com)の6月21日の記事にはユタ大学の小児科医は、南半球のオーストラリアで彼らの夏(我々の冬)にRSウイルス感染の急激な増加があったため注意を払っていたと述べ、ヒューストンの医師からもテキサス州で今年の3月から5月にRSウイルス感染が増加したことを明らかにしています。何でRSウイルス感染が増加したか直接的な説明はありませんが、昨年はロックダウンやマスク着用でRSウイルス感染症が減少していたのが、コロナ感染症数が一時減少しその制限が緩んでいるからではないか、というものです。

日本の小児科医は本末転倒、まずコロナかどうか調べるべき

当院周辺の小児科に子供を受診させたお親御さんから話を聞くと、風邪です、RSウイルス感染ですとお子さんが診断されるようです。それも大部分は何も検査なしだそうです。それを聞いて大いに疑問を感じます。まずコロナ感染症を否定してから初めてそのほかのウイルスの可能性を考えるべきではありませんか。

ウイルス干渉

昨年から今年の初めまでインフルエンザがほとんどありませんでした。これはマスクをしていたことに加えて、「ウイルス干渉」が起きたからではないかと言われていました。昨年11月2日付の日経メディカルに掲載された北里大学の中山哲夫先生の記事によると、細胞レベルでのウイルス干渉は、あるウイルスが1個の細胞に感染すると、他のウイルスには感染しにくくなる現象で、機序の一つとして感染細胞が産生するインターフェロンによる抗ウイルス作用で他のウイルスが感染しにくくなるというものです。細胞レベルの干渉が、個体、さらにはその個体が所属する集団でのウイルス干渉を引き起こすそうです。誤解しがちなのは、同時に感染はしないかもしれないが、あるウイルスが猛威を振るっていてもそれが少しでも減少すると他のウイルスが猛威を振るうことは大いにあり得るという事です。このような関係は、インフルエンザ、RSウイルスの他にもライノウイルスでも確認されています。すなわち、コロナが少しでも減ればほかのウイルス感染が増えるということは、ミクロ的には家庭内で、さらにその住んでいる地域で、あるいはマクロ的には日本全体や世界でも十分起こりうるのです。

今年の冬の暗い予測

本年7月15日、英国の医学研究アカデミーが「COVID-19、将来に備えて」という報告書を公表しました。これを読むと今年の冬は、コロナ、インフルエンザ、RSウイルスの3つの大きな波が来ると予想しています。コロナだけでも大変なのにインフルエンザとRSウイルス感染が例年の2倍に達すると予測しています。RSウイルス感染は、乳幼児のみならず高齢者にとっても脅威です。ウイルスが入れ代わり立ち代わり襲ってくるということです。さらに、さらに暗い気持ちにさせるのが、喘息、肺気腫(COPD)、虚血性心疾患、心筋梗塞の増加および増悪が予想されているそうです。コロナワクチン接種のみならずインフルエンザワクチン接種も受けるべきです。呼吸器疾患で通院されている患者様は吸入治療の継続をお願い致します。